≪書　評≫

寒さと雪，畠山久尚，積雪科学館，昭和30年11月初版（積雪シリース第8，新書版101頁　100円）

雪の少い地方の人にとって，積雪，深雪，吹雪といった言葉は楽しい連想，例えばスキー，温泉，炉ばた，こたつ，酒などの思い出を引き出すことであろう．しかし深雪地帯の南秋田に育った評者にとって，雪は苦難の象徴でしかなく，吹雪の吠える音が今でも耳に響き，冥土のような暗い野山が目にちらつく．

この本の表紙は暖いいろりばたとランプに窓から見える夜の雪をあしらったもので，もの苦しみを知っている身にも，ああこんな夜もあったと，懐しさをかきたてる．内容も冬の天気や異状気象から書出して，雪，氷，雪崩を解説し，冬の富士登山，雪に関係のあるスイス旅行記を掲げ，最後に氷の方言に関する覚書をまとめてあるが，樺太の極寒の経験を持つ著者の筆は，けっして明るい東日本の客間に坐っていて雪を想像しているのではない．いずれも信頼の置ける確かな書きぶりで，総合的な解説書ではないけれども，科学的な物の見方に対する一つの重要な暗示がある．著者の研究者としての態度は雪の電気の項によくうかがわれ，行きとどいた研究計画はこのようにして行われるべきである．

評者の好みとしてはスイス旅行記が，著者の初めてのヨーロッパ行なのに，落ちついたプラン，細かく正確な観察を見せて感服した．惜しいのには旅行時期が秋であったことで，冬のエンガディン，特にサンモリッツ界隈の風物，これこそ豊かな設備を伴えば，冬も天国であることを立証する世界を著者が再遊のとき訪れることを希望する．　（佐貫亦男）

◇……◇

J. Pepper : The Meteorology of the Falkland Islands and Dependencies 1944～1950. London 1954 249p

最近，南極大陸の紹介が雑誌や新聞紙上をよくにぎわしているが，気象方面でも，余り確たるデータにもとずいているものは少いようである．この書は，このようなキワモノとしてまとめられたのでは決してなく，Polar Meteorolgy に関する数少い書物の一つである．

フオークランドが南緯55～6°であるし，観測を行ったのがグラハムランドであるから，南極大陸としては最も緯度の低い部分であるが，多年にわたるルーチン観測の結果は得がたいものである．地名をあげると，Marguerite Bay, Argentine Islands, Port Lockroy, Hope Bay, Deception Islands, Admiralty Bay, Signy Islands, Cape Geddes, South Georgia, Stanley である．第1部には，これらの諸地点における観測結果をまとめて議論している．すなわち，気象要素別に気圧・気温・風・雲・降水と日照・湿度と視程，およびそれらの総括となっており，さらに付録として南極の収斂，流水の情況，1950年の氷の状態などを付している．第2部には上記の諸地点について，それぞれ観測史，地形，付近の氷雪の概況について述べている．とくに等高線図が各1頁と写真がついていて，現地の理解に便利であり気象のデータに対する親近感を増す．第3部は表で，(1)気圧，気温，相対湿度，雲量，天気（型）．(2)最高，最低気温の頻度．(3)日照．(4)降水．(5)風向と風速．(6)雲高．下層雲量．(7)視程の7つに分類されている．

北半球の大循環から，南半球のそれにも解析の手が延ばされつつある今日，これらの資料の持つ意義は大きいものがあろう．とくに西経35°～75°，南緯50°～65°付近の平均気圧分布図がえがけただけでも，特筆すべきだというのは大げさであろうか．　（吉野正敏）

◇……◇

地震と津波（観察と実験文庫）
和達清夫・広野卓蔵共著
同和春秋社版，価 350円（〒40円）

日本は地震国で，研究も非常に盛んであるだけに，地震に関する普及書も枚挙にいとまないほどである．けれども，その多くは専門学術書と大差ないような固ぐるしいものであったり，あるいは，あまりに抽象的で，最近の地震研究の有様などはとてもうかがい知ることのできないものであったりして，その使命を十分に果しているものはきわめて少ない．それは，すぐれた研究者にして，かつ，すぐれたライターたり得る人が少ない上に，研究者達のこうした普及啓蒙運動に対する熱意が概して乏しいことによるもののようである．

和達，広野両博士が該博な学識と豊富な経験とをいかしてまとめあげられた労作「地震と津波」は，こうした見地から特に推奨すべき良書であって，地震研究の輝かしい成果を広く一般の人々の生活に溶け込ませるために大いに役立ち得るものと考えられる．かずかずの興味深い具体例が巧みに織り交ぜられている本書は，地震研究などにはほとんど縁の無いような人々にも親しみやすく，地震とはおよそ如何なる現象であるか，そして，その研究が古来どのように進められてきているかをよく理解させてくれると共に，ひいては更に，広く一般に，物事の観察・研究のしかた，また，その楽しさ，尊さをしらずしらずのうちに教えてくれる．

中・高校生を対象として，専門的なむずかしい事がらをもなるべくやさしく説明して行こうとした努力のあとがよくうかがわれるが，それでもなお，中学生などには少し無理があり，高校生以上向きのようで，むしろ，学校教師や気象官署職員などをはじめとする広く一般の方々に一読を勧めたい書物となっている．230ページの大書だけに，率直に言って，後半にはいるとややら列的となり，文章も乱れがちになってはいるが，主として野口憲男氏の手になるという，165にもおよぶ巧みなさし絵が，最後まであかず読みとおさせてくれる．

（諏訪　彰）